

第25回全国大会 開催のご挨拶

第25回全国大会は「国際文化学と教養教育」をテーマといたします。

2001年に設立された日本国際文化学会は、時代が急速に国際化する中で、文化の接触・変容を捉えるために、旧来の学問体系を拡張し続けてきました。それゆえ本学会の特性は自ずと学際性を帯びています。そして我々の態度・姿勢は、大学において幅広い知識領域を横断する教養教育と共通しています。

高等教育において専門に先立つ学びとして位置づけられる教養教育は、多様な分野を往還しつつ、人間や社会を総合的に理解しようとする試みです。また、教養教育と並行して行われる語学教育は、新たなことばを獲得することで、異文化に接触するための具体的なアプローチです。これらの教育は幅広い知の獲得に加え、異文化へのまなざしの涵養という点において、国際文化学の関心と本質的に重なるものと言えるでしょう。

他方で学会設立から四半世紀を経た今、大学教育をめぐる状況は大きく変化しています。専門分野の先鋭化が進む一方で、各所で叫ばれる「実学」の重視により、教養教育が軽視される事例は少なくありません。また生成AIの発達により、語学教育のあり方も問い直しを迫られています。なぜ教養教育を行わねばならないのか。なぜ新たな言語を学ばねばならないのか——国際文化学を学ぶ我々にとって、学際的な学びや、他者のことばを学ぶことは、ともすれば自明のことかもしれません。しかし今一度これらの問いに立ち止まり、教養教育の意義を改めて議論したいと思います。

本大会のシンポジウムでは、「国際文化学と教養教育」について、研究と教育の双方の観点から多角的に議論することになります。国際文化学が見据えるべき教養教育とは何か——学会設立以来の歩みを振り返りつつ、25周年を迎えるこの節目に、国際文化学が果たしうる役割を再確認し、次の時代の展望を切り拓く場を設ける所存です。会員の皆様の積極的なご参加を切にお願いいたします。

第25回全国大会 実行委員長 高橋梓（近畿大学）



全国大会開催要項

【開催日時】

2026年7月11日（土）～7月12日（日）

【開催大学】

近畿大学

〒577-0813 東大阪市新上小阪228-3
Eキャンパス C館

【参加費・申込】

Web決済システムPeatixでの事前申込となります。学会ホームページ等にて今後ご案内します。

問い合わせ先：第25回全国大会実行委員会
jsics_2026@jus.kindai.ac.jp

〒577-0813 東大阪市新上小阪228-3
Eキャンパス C館 5J
高橋梓研究室気付

会場アクセス

各主要駅からの経路・所要時間（目安）

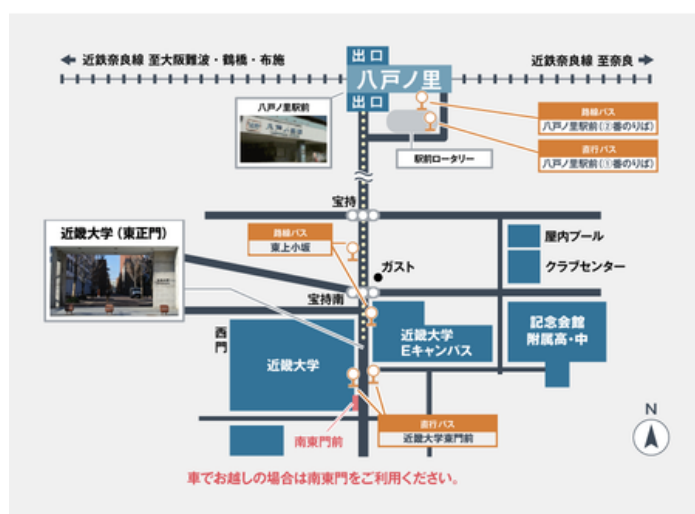
三宮から 約62分	阪神 神戸三宮	阪神本線・阪神なんば線・ 近鉄奈良線（快速急行）約47分	JR・近鉄鶴橋	近鉄大阪線（普通） 約8分	近鉄長瀬	徒歩 約10分
大阪（西田）から 約30分	JR 大阪	JR大阪環状線外回り 約15分				
天王寺から 約20分	JR 天王寺	JR大阪環状線内回り 約5分		近鉄奈良線（普通） 約9分	近鉄八戸ノ里	徒歩 約20分
なんばから 約20分	近鉄 大阪難波	近鉄奈良線 約5分 近鉄奈良線（普通） 約15分				直通バス 約6分
奈良から 約39分	近鉄 奈良	近鉄奈良線（急行） 約18分	近鉄 石切	近鉄奈良線（普通） 約15分		
大阪（西田）から 約43分	JR 大阪	JRおおさか東線（JR新大阪経由） 約28分			JR 俊徳道	直通バス 約15分
京都から 約61分	JR 京都	JR京都線（新快速） 約23分	JR 新大阪	JRおおさか東線 約23分		

※ 日曜日は直通バスがありません

近鉄 長瀬駅から



近鉄 八戸ノ里駅から



共通論題の発表タイトル

聴くことから始まる共生——周縁から〈普遍〉を問い直す
代表者：加藤恵美（帝京大学）

「文化政策」の光と影——移民・外交・規範
代表者：金子聖仁（東京大学）

鶴見和子の南方熊楠研究とその後
代表者：松居竜五（龍谷大学）

多言語化社会における外国語教育の比較研究——欧州4か国の複眼的分析と日本への示唆
代表者：大場智美（多摩大学）

日本国際文化学会(編)『共に生きるための国際文化学—文化と文化をつなぐ第一歩』
(昭和堂、2026年)刊行に寄せて

馬場 孝 (日本国際文化学会顧問)



日本国際文化学会の総力を結集し完成された本書を前に、刊行にご尽力された関係者の皆様への感謝、祝福、そして敬意の言葉は、どれほど書き連ねても尽くすことはできない。わけでも、「20周年記念事業推進委員会」を2021年の発足以来牽引された、菅野敦志委員長、吉岡剛彦副委員長、加藤恵美事務局長。お三方の顔を思い浮かべると、「お礼の言葉もない」「頭が下がる」といった慣用句、常套句にも、掛け値ない実感が思わずこもる。

お三方の名前には、巻末の執筆者紹介に「本書全体の編者」として、小さな「*」が付せられている。しかし、この「アステリスク」が、どれほど巨大で重い「しるし」であることか。これは、「序章」を執筆され、スタート時より事業に伴走された松居竜五学会事務局長、各章「総論」を担当され、同じく多大なご貢献をされた分科会リーダーの皆様、困難な時期を通して事業を支えられた都丸潤子前会長、川村陶子現会長が、最も良くご存じのところであると思う。

「記録に残すのは大事なこと」であるから、事業開始時点での会長として、ニューズレターに一文を草するようにとの事務局からの依頼である。クロノロジカルな客観的記録については他所に譲り、ここではカイロスの心的心象記録/記憶を供することで、その要請に応えたい。

発端

「学会創立20周年が近づいていますが、今回は、盛大な記念大会の開催ではなく、何か出版物の刊行を企画してみませんか？」あれは2019年度からの学会会長就任が近づいた、とある常任理事会後のことだった。出版というアイデアを恐る恐る口にした、最初の機会であったと思う。「ぜひやりましょう！」と即座に、大きな声で呼応してくださったのは、誰だろう、加藤恵美会員だった。あのひと言がなければ、この事業は始まらなかったかもしれない。そして、「共に生きる工夫」が、かくも踏みにじられる時代と世界が到来しようとは、当時は思いもよらなかった。

当初「教科書」「テキスト」は念頭になかった。それは、前任校での所属学科で編んだ「教科書」をめぐる体験に基づく。刊行直後には学科内でテキストと

して使われていた。しかし、数年も経ずして「廃用」となった。理由として挙げられたのは、執筆した教員が異動、転出で「いなくなった」ためであった。「書いた人しか使えない」とすれば、それは「教科書」といえるだろうか？ 一方、他大学による既刊の「教科書」にも「使いにくさ」を感じていた。「読み物」としては実に面白い。しかし、テキストとしての採用は躊躇われた。仮に「教科書」とは何かの学問を修めるための「道具」とであるとすれば、作成した人しか使えない「道具」とは何だろうか。同じ「国際文化学」の授業内容が、A大学とB大学でここまで違う、ということは、何を意味するのだろうか。

代わりに唱えたのは、「ハンドブック」「キーワード集」「事典」などの制作であった。以下のような考えがあった。

第一に、「独自性」の希求である。「学際性」は確かに国際文化学の特質であろう。しかし、学際性への安住は、他の学問分野からの、理論や概念の一方的摂取の永久運動につながらないだろうか。対象が人文・社会の広い分野に及ぶので、テーマは他の学問と重なるであろう。しかし、「国際文化学」ならではの、「国際文化学」らしい視角や考え方が、学会創立20年が近づき、育ってきていないだろうか。学会誌『インターカルチュラル』の毎号の充実した内容や全国大会での学会報告の蓄積の中から、そのような「宝」の発掘と彫琢の可能性も念頭にあった。

第二に、「汎用性」の模索である。「国際文化現象」ともいうべき、幅広い対象の分析や観察を行う際、意識するしないにかかわらず、私たちは「裸眼」ではなく、焦点距離や射程範囲の異なる、何らかの「レ

ンズ」を用いているに違いない。たとえば「ジェンダー」「ダブル・バインド」「認知的不協和」などの概念を手に入れたことで、私たちの「世界の見え方」すらも変わってきた。その「レンズ」は、使い方さえ習得すれば、様々な用途に、誰にでも使える道具になるかもしれない。属人性を脱却した用語集、ハンドブックという漠然としたイメージを抱いていた。

第三に、学会内部の「ネットワーク」の緊密化である。当初、「論文集」という他学会の記念事業の先例について、ご教示、ご助言いただいたこともあった。しかし、「論文集」の出版は、質の高い論文の掲載が続く学会誌『インターカルチュラル』に屋上屋を架すことにもなり、特定少数の会員の参加ではなく、最大多数の会員の関与を得ることにより、学会内部のネットワークの緊密化と組織強化を図りたいという「下心」も正直なところあった。

「寄りかからず」

「言うは易く・・・」とはこのことであろう。「行うに難い」その後の事業の全ては、アステリスクのお三方をはじめとする方々の多大なご尽力によって進められていった。「言い出して」おきながら、その後ほぼ「丸投げ」「拱手傍観」であった私は、謝意、

祝意、敬意の前に、お詫びの言葉から始めなければならない立場にある。

頁をめくりつつ、思いがけず脳裏をよぎったのは、茨木のり子の詩「寄りかからず」の次の一節であった。

もはや できあいの学問には寄りかかりたくない

『国際文化学事典』刊行を目指し、最初期に試みた科研費の申請は採択にいたらなかった。事典刊行に定評ある出版社との交渉も、最終的に形にはならなかった。しかしそれは、『事典』という形式に宿る「できあいの学問」枠組みを突き破るダイナミズムが、「国際文化学」に内在していたからではなかろうか。今にしてわかる。私の当初の3つの目論みも、一面的で固定化された「できあいの学問」観に寄りかかったものだった。本書は、「国際文化学」のアイデンティティを鮮明にしつつ、旧来の学問観を打ち破る力動に満ち満ちている。組織強化などという実利目的を超えて、人と人、知と知、ディシプリンとディシプリンのぶつかり合いが「永久運動」するかのような、新しいタイプの学問の誕生すら予感させる。「共に生きる工夫」が切に求められる時代と世界に、その第一歩を踏み出した本書に、心からの祝福を贈りたい。

研究会報告

国際文化シンポジウム

『死者のカルシッコーフィンランドの樹木と人の人類学—』著書とのブックトーク

齋藤志帆（東北大学）

2026年2月7日（土）の14時30分から16時30分まで、東北大学川内キャンパス北マルチメディア教育研究棟6階大ホールにて、東北大学国際文化研究会主催、日本国際文化学会共催で「国際文化シンポジウム『死者のカルシッコーフィンランドの樹木と人の人類学—』著者とのブックトーク」を開催しました。

講師として、『死者のカルシッコーフィンランドの樹木と人の人類学—』（北海道大学出版会、2023年）の著者で日本国際文化学会会員である北海道大学文学研究院の田中佑実氏をお招きし、近畿大学法学部の高橋梓准教授にコメンテーターを務めていただきました。運営は東北大学大学院国際文化研究科博士後期課程の小山あゆみ、王霄漢、齋藤志帆が行いました。

読むたびに心に安らぎを与えられ、研究者として勇気もらい、そして遠く、まだ知らない土地へ行ってみたくなる『死者のカルシッコーフィンランドの樹木と人の人類学—』について、著者である田中先生から直接、ブックトークという形でご講演いただき、また対話の機会を与えてくださったことを、深く感謝申し上げます。



充実のシンポジウムをありがとうございます！

私の研究歴

本号では瀧口順也会員にご寄稿いただきました。
近現代ヨーロッパ史から始まる研究の歩みをお読みください。

10年以上にわたって籍を置くだけの会員だった私が、ニュースレターで経歴を紹介するのもおこがましいのですが、光荣にもご依頼いただいたので寄稿させていただきます。

私の会員歴は、2013年度に全国大会が龍谷大学で開催された際、事務局長を務めることになり、同時に入会したことから始まります。しかし、それ以降は専門領域である歴史学系の学会・研究会での活動が主であり、『インターカルチュラル』掲載の論文に目を通す程度の関わりでした。会員であるにもかかわらず、多くの機会を逸しているのではないかと感じ、第23号（2025年）への論文投稿や、2025年度の全国大会フォーラムへの参加などを通じて、再度学会と関わる機会を得ました。

私の研究歴は、専ら歴史学、とりわけヨーロッパ近現代史の研究者としての歩みとなります。学部生時代から近現代ヨーロッパ史に関心を持ち、20世紀ヨーロッパ史のゼミで学びました。その後、イギリスのマンチェスター大学修士課程（近現代ヨーロッパ史専攻）へ進学しましたが、その少し前から本格的にソ連史を研究対象にしたいと考えるようになり、イギリスで研究をスタートさせました。修士課程の開始当初は、革命後のソ連史への関心こそあったものの、具体的な対象は定まっていませんでした。そんな折、指導教員からの「党大会の研究はどうだ？」という何気ない一言がきっかけとなり、ソ連共産党大会を対象とする研究を開始しました。これは現在に至るまで、私の中心的な研究テーマの一つとなっています。

研究対象を政治集会に定めたことは、結果として文化学・文化研究との橋渡しとなりました。長きにわたり、ソ連共産党大会の研究は政治的側面（指導者の発言、決議の内容、権力闘争など）に集中してきました。他方で、マンチェスター大学では多くの歴史研究者が広い意味での文化史のアプローチをとっていました。ここでの文化史とは、芸術作品などを対象とした狭義のものではなく、イメージや表象、身体、日常的実践などを含む広範な文化的行為を対象とし、それらのパフォーマンス的な意味や権力・社会構造との関係を問うものです。そのような観点を導入してソ連の政治集会を再検討することは、大きな意義があるように思えました。

博士課程在籍時には、計1年近くモスクワに住み、国立のアーカイヴでひたすら史料を閲覧する日々を過ごしました。

瀧口 順也（龍谷大学）



ゼミ生の皆さんと

その成果として、博士論文ではアーカイヴ史料を参照したうえで、党大会会場の空間演出、指導者表象、プロパガンダ・イベント、参加者の経験とその意義などの観点から、1920年代の共産党大会の様相とその変容を考察しました。PhD取得後は北海道大学スラブ研究センターの研究員として2年間勤務し、その時期は1930年代の党大会を扱いました。

龍谷大学着任後は、ソ連国外の共産党員に対してコミュニスト・インターナショナルやソ連指導部がどのようにその権力を表象したのか、あるいはヨーロッパの共産党内でモスクワからのメッセージがどのように読み替えられ受容されたのかなど、グローバル／トランスナショナルな視点からも、同時期の共産主義者や共産党の研究を進めています。多くの歴史研究者も所属する国際文化学会ですので、今後はより積極的に学会の活動に参画できればと考えています。



マンチェスター、趣のある風景ですね！

日本国際文化学会編『共に生きるための国際文化学』出版のご案内

日本国際文化学会創立20周年記念事業として、会員の皆様にご協力をいただきました『共に生きるための国際文化学』（昭和堂/2,970円（税込））が出版されました。

[昭和堂のリンク](#)からネット書店（amazon等）で注文をすることも可能です。リンクには、目次や執筆者も記載されています。



会員交流会「JSICSオンラインカフェ」のお誘い

昨年3月に行ったオンラインの大学間情報交換会で「会員がオンラインでも交流できる場があれば」というご意見をもとに企画しました。積極的なご参加をお待ちしております。

日時：2026年3月23日（月）15時～16時30分（途中入退場可）

会場：Zoomによるオンライン会議

※Zoomリンクは前日22日をめどに会員MLと学会ウェブサイトで共有します。

内容（予定）：第1部「『共に生きるための国際文化学』活用術」

第2部「会員がつくる、日本国際文化学会のこれまでとこれから」

※会員の方であればとくに準備等は必要ありません。日ごろの研究教育活動での悩みや疑問、学会へのご要望やご意見など、この機会にぜひお知らせください。

参加申込み：下記リンク先のフォームから事前のお申し込みを推奨いたします。

準備の都合上、なるべく3月18日（水）15時までにお申し込みください。（当日参加OK）

参加申込み用フォームへのリンクは右のQRコードか[リンク](#)から

問い合わせ先：日本国際文化学会事務局 jsics@world.ryukoku.ac.jp



第16回平野健一郎賞募集（締切：4月30日）

第16回平野健一郎賞の募集を開始します。多数のご応募をお待ちしております。応募に関しては学会ウェブサイトの「平野健一郎賞規程」をご覧ください。

- ・ 応募結果の発表：第25回全国大会総会において発表し、授与式を行います。

応募先/問い合わせ先：日本国際文化学会事務局 jsics@world.ryukoku.ac.jp

2026年度のICCOに向けて

2026年度の短期集中セミナーは北海道札幌市で実施予定です。日程は8月21日（金）～8月28日（金）、参加費は45,000円（宿泊費、朝食、懇親会費用2回分含む）。期間中、学会会員で見学等を希望される方はICCO事務局までご連絡ください。セミナー最終日の28日にはフィールドワークの成果発表会を実施します。発表会はオンラインでの配信も予定しております。

2025年度の資格認定申請受付は3月31日（消印有効）までとなっております。該当する学生がおられる場合には、申請のお声がけをお願いいたします。短期集中セミナー参加者の申請のほか、学習活動報告による資格取得も可能です。参加校および会員のみなさまのご協力をどうぞよろしくお願いいたします。

※ 詳細は学会ウェブサイトのICCO資格認定制度から、「2025年度版 学生からの申請（資格認定申請）」をご確認ください。

問い合わせ先：ICCO事務局（松居・池田） kumagusu@world.ryukoku.ac.jp

ご連絡先変更時のお願い

ご所属、ご住所等の変更の際には、学会事務局までお知らせください。4月下旬に学会誌『インターカルチュラル』第24号を発送予定ですのでご協力をお願いいたします。

連絡先：日本国際文化学会事務局（松居・池田） kumagusu@world.ryukoku.ac.jp

会費納入について

2025年度会費を未納の方はご納入をお願いします。正会員 一般会員：10,000円、大学院生：5,000円 学部生：2,000円（学会誌は別途購入）

◆ゆうちょ銀行から◆

記号番号：00920-8-325835 名義：日本国際文化学会

◆ゆうちょ銀行以外から◆

ゆうちょ銀行 店番〇九九・店番099・当座預金・口座番号0325835 名義：日本国際文化学会

- ・過去の会費未納分は相当額の学会誌購入でも充当できます。
- ・2026年度分年会費納入のご案内は次号のニューズレター発行時（6月）に行います。

【編集後記】

記事にもありますように、ついに『共に生きるための国際文化学』出版！私も著者の一人として嬉しい限りです。会員の皆様もぜひ手にお取りください！。

二月には東北大学でシンポジウムがあり、私もコメンテーターとして登壇いたしました。主催の皆様にご改めて御礼申し上げます！（近畿大学：高橋梓）



仙台在住時の仲間も駆けつけてくれました！

共に生きるための国際文化学 文化と文化をつなぐ第一歩



文化は人々をつなぐ力も分断する力ももつ。
複雑な文化間の関係性を読み解き人々が共に生きるための道を探る、国際文化学の入門書です。

このたび学会の20周年記念事業として、昭和堂より『共に生きるための国際文化学—文化と文化をつなぐ第一歩』を出版いたしました。「国家と国際文化交流」「中心・周縁と文化政策」「人の国際移動と文化」「ことばと境界」「大衆文化と境界」「フェミニズム、ジェンダーと文化」「環境・災害と文化」「記憶の共同体」の8つの章にわたり、国際文化学のさまざまなトピックがわかりやすく解説されています。

各章では学会を牽引する研究者が総論を担当し、総勢86名が執筆しています。

初学者にも読みやすい内容で、トピックごとの参考文献、巻末のリーディングリスト、各章末には「国際文化学的に考察するポイント」もついており、ゼミの講読テキストやハンドブックなどさまざまな形でご利用いただけます。

著者	日本国際文化学会 編
出版年月日	2026/1/30
ISBN	9784812224298
判型・ページ	A5・288ページ
定価	2,970円（本体2,700円＋
出版社	昭和堂

■ 執筆者紹介（＊は本書全体の編者）

松居竜五 [序章]、齋川貴嗣 [第1章総論、1-13]、高光佳絵 [1-1]、湯浅拓也 [1-2]、大山貴稔 [1-3]、張 雪斌 [1-4、1-12]、芝崎厚士 [1-5]、飯森明子 [1-6]、小川 忠 [1-7]、岡 眞理子 [1-8]、渡辺愛子 [1-9]、川村陶子 [1-10]、鄭 榮蘭 [1-11]、
＊菅野敦志 [第2章総論、2-7]、中村美帆 [2-1]、飯笹佐代子 [2-2]、秋野有紀 [2-3]、石松紀子 [2-4]、奥村みさ [2-5]、王 維 [2-6]、照屋 理 [2-8]、目黒志帆美 [2-9]、齋藤大輔 [2-10]、川崎賢一 [2-11]、
＊加藤恵美 [第3章総論、3-9]、都丸潤子 [3-1]、崔 紗華 [3-2]、上地聡子 [3-3]、鶴園裕基 [3-4]、稲木 徹 [3-5]、杉村美紀 [3-6]、土谷岳史 [3-7]、趙 貴花 [3-8]、野上恵美 [3-10]、南田明美 [3-11]、高橋 梓 [第4章総論、4-10]、アーント沙羅 [4-1]、大喜祐太 [4-2]、増渕佑亮 [4-3]、齊藤美野 [4-4]、坪井睦子 [4-5]、水野真木子 [4-6]、朱 琳 [4-7]、安藤博文 [4-8]、松井真之介 [4-9]、岩野雅子 [4-11]、鈴木裕輔 [第5章総論、5-8]、植 朗子 [5-1]、小阪裕城 [5-2]、藤田賀久 [5-3]、坂口可奈 [5-4]、木原 誠 [5-5]、中川拓哉 [5-6]、葉柳和則 [5-7]、深松亮太 [5-9]、倉 真一 [5-10]、相原征代 [第6章総論]、石川照子 [6-1]、宮地歌織 [6-2]、大和裕美子 [6-3]、第8章総論、8-5]、須藤瑞代 [6-4]、土屋明広 [6-5]、四方由美 [6-6]、＊吉岡剛彦 [6-7]、鳴原敦子 [6-8]、第7章総論]、中山佳子 [6-9]、橋本美波 [6-10]、熊本早苗 [7-1]、田中佑実 [7-2]、丹羽一晃 [7-3]、若林一平 [7-4]、山本博之 [7-5]、安溪遊地 [7-6]、西 芳実 [7-7]、友永雄吾 [7-8]、鈴木 滋 [7-9]、奥田孝晴 [7-10]、齊藤 理 [第8章総論、8-7]、中野 聡 [8-1]、阿部 純 [8-2]、鍋島孝子 [8-3]、小林文生 [8-4]、山口祐香 [8-6]、関根理恵 [8-8]、月野楓子 [8-9]、山脇千賀子 [8-10]